

レ
ッ
ド
サ
ン
プ
ラ
ッ
ク
ク
ロ
ス
Ⅲ

目
次

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～30頁までを収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の（次ページ）をクリックするか、キーボード上のキーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

レッドサンブラッククロス8
死戦の太平洋1

1 サマー・オブ・ウォー

17

2 対潜戦隊〈タイフーン〉

81

3 狼たちの海

149

レッドサンブラッククロス9
死戦の太平洋2

1 狂熱の怒濤

179

2 我らは挫けず

225

3 死戦

269

4 セカンド・ストライク

295

レッドサンブラッククロス10
パナマ侵攻1

1 煉獄の虜

2 その年の終わり

3 1949

レッドサンブラッククロス11
パナマ侵攻2

1 秘匿名称…〈贖罪〉

2 自然的秩序

3 フェア・プレイ

329

333

395

435

451

457

505

561

図版一覧

〈兵器〉	
M4(a) “シャーマン” 中戦車	43
松級	63
安土級	71
陽炎級	73
飛燕（川崎三式戦闘機）	105
五式戦闘爆撃機	105
X X IX 型	251
駆逐戦車M4(a) ヤークト・シャーマン	301
ユンカースJu52地上制圧戦術試験機	305
三菱艦上戦闘攻撃機 烈風改Ⅱ	309
千歳級	317
V号中戦車パンテルⅡ	384
七式中戦車	385
三菱艦上戦闘機 旋風	389
愛知艦上攻撃機 流星改Ⅱ	391
メッテルニヒ級	445
V号重駆逐戦車ヤークトパンテルⅡ	565

〈地図〉

第三次世界大戦：戦略的概観	1948年11月現在	12
第三次世界大戦：戦略的概観	1948年12月現在	176
第三次世界大戦：戦略的概観	1949年1月現在	454
ドイツ北米総軍、内陸侵攻作戦〈グスタフ〉	1948年11月	46
侵攻作戦〈グスタフ〉：合衆国資源地帯攻略	1948年12月	206
侵攻作戦〈グスタフ〉：第二次反応兵器攻撃	1948年12月	416
侵攻作戦〈グスタフ〉：自発的侵攻停止線への進撃	1949年1月	474
主要海上交通路とドイツ潜水艦の展開海域	1948年11月現在	126
主要海上交通路とドイツ潜水艦の展開海域	1948年12月現在	192
病院船団護送計画「アンクル・アブナー」と 合衆国駆逐艦ベッドフォードの航跡		373
中南米：戦略的概観（ドイツ主要拠点）		406
中南米：戦略的概観（ドイツ主要拠点及び中南米各国の動向）		540
パナマ運河地帯	1948年12月現在	440
パナマ運河地帯： 大ドイツ帝国軍の主な防衛配備	1949年1月現在	520

装帧 山影麻奈

レッドサン ブラック クロスⅢ

レッドサンブラッククロス 8

死戦の太平洋 1

REDSUN BLACKCROSS vol.8

PACIFIC HEAT

by

Daisuke SATO

1999

小笠原禎氏の想出に



西半球

凡例	
■ 大ドイツ帝国(欧州連合) 領域	⇨ 日英による政治工作重点地域
◻ 〃 寄り中立国	→ 日本側通商路
▨ 日本帝国(日英同盟) 領域	--- (休止中)
◻ 〃 寄り中立国	→ ドイツ側通商路
➡ ドイツによる政治工作重点地域	→ △ → ドイツ側による通商破壊戦実施海域
➡ ドイツ側主要作戦地域	

第三次世界大戰：戰略的概觀

1948年11月現在

World War III, Strategic Situation : Nov.1948 present



東半球

ドイツ帝国軍機密信 48 / OH34BL5MN-DS

通信網 ヽゴリアテゝ あるいは ヽグライアゝ にて伝達

機密区分 (国家機密)

発 帝国軍対外諜報部

宛 総統官邸

本文

偉大なる総統閣下！

小官担当部局よりもたらされる報告の遅さに驚かれています。お怒りはごもつともであります。北米侵攻開始以後に生じた報告遅延は閣下のまったくあずかりしらぬ原因によつて生じたものであり、たとえいかなる説明が可能であろうとも、遅延の全責任が小官にあることは疑う余地がありません。小官はその責任を痛感し、今次大戦の概況を御報告するとともに、ただひたすら、偉大なる閣下の御寛恕を乞ひ願うものであります！

〈ゴールド〉の秘匿名称をもつて立案された対日米統合戦争計画は、北米侵攻作戦〈ヴァレンシユタイン〉、対日陽動作戦〈フリードリヒ〉として一九四八年五月一二日をもつて発動、全ドイツ帝国軍ならびに欧州連合諸国軍は北米ならびにインド洋において行動を開始しました。その成果は事前の予測をまったく越えるものであります！

あれほど強大に思えた合衆国は、ヴィシー・フランス領ケベックより出撃したわが北米総軍の猛攻により短時日で東部主要産業地帯・大人口居住地域を失い、近代国家として麻痺状態に陥りました（むろんそれには、総統閣下の直接命令によって使用された反応兵器によって生じた絶大なる物理的破壊・心理的衝撃効果が影響を与えております）。

一九四八年一〇月時点の調査によれば、北米総軍は修正された第二段作戦（グスタフ）に基づき、合衆国中西部および西部の穀倉・資源地帯へと戦果を拡張しつつあります！これに対して、敵軍はなんら有効な対抗策を打ちだしておりません。合衆国陸軍はいたずらに損害を重ね、大西洋艦隊は潰滅し、太平洋艦隊も我が潜水艦によって大きな損害を受けております（かれらの有する航空兵力も同様であります！）。また、カナダに展開する日英同盟軍も（ヴァレンシユタイン）初期の我が猛攻によって戦力を消耗し、攻勢能力を失っております。

一方、インド洋におけるわが主要作戦行動は、日英同盟戦力の吸引という当初目的を完遂し、終結いたしました。インド洋のわが前哨拠点、ソコトラ島に対しておこなわれた敵の大規模侵攻はその証左と言えるであります。確かにソコトラは失われましたが、そのかわりに総統閣下は、北米及び太平洋においてあらたな攻勢を発起しうる時間を手に入れたのであります！われわれは、欧州全軍勢力を投じ、忌むべき自由主義と黄色人種優越論に支配された世界を解放しこの惑星のすべてを国家社会主義の福音で満たさねばなりません。その機会はいまここにあります！

総統閣下！ベルリンを新時代のヴァチカンとすべく、これまでよりさらに強い忠誠と献身を小官はあなたに誓うものであります！

偉大なる第三帝国総統にして全欧の統治者アドルフ・ヒトラー万歳！

ジーク・ハイル！

カナス

1 サ マ ー ・ オ ブ ・ ウ ォ ー

「貴方がたは我々に武器を与えました。

我々はその主人にならぬわけにはいかなかったのです！」

——カレル・チャペック「R^{エル}・U^ウ・R^{エル}」

1 潮気

一九四八年二月二五日

午後三時二七分（日本標準時）

浦賀水道 日本、太平洋

爆発は右舷後部水線下で発生した。

菅沼拓三中尉は意識をとりもどした。といっても、自

分の置かれた状況を認識できていたわけではない。艦に強烈な震動が生じ、その時ぐり抜けようとしていたハツチに叩きつけられたことを覚えていただけだった。

誰かの声が耳朶を打った。怒声だった。右肩と両頬に痛みがあった。後者のほうが強かった。負傷したのかもしれない。

菅沼は頬に左手をあてた。なにかが手の甲にぶつかった。ふたたび怒声。菅沼はようやく理解した。臉をひらく。誰かが、彼を平手で打っているのだった。

やや混濁した意識のまま菅沼は相手をにらみつけた。怒鳴り、平手をくわせていたのは戦隊司令部の通信参謀だった。菅沼が目をあけたことを知ったかれは、おお、貴様、大丈夫かと大声をあげた。

いったいなにが、菅沼はそうたずねかけ、自分の三平規管が平衡感覚の維持に苦勞していることを知った。艦が傾いているのだった。右舷に傾斜していた。

容易には信じられなかった。艦の現在位置は浦賀水道であり、東京湾の入り口と言って良いそこは決して戦場ではないはずだった。しかし艦は現実に傾斜しており、菅沼は艦橋最下部、セルター甲板の通信指揮室、その入口に倒れていた。

どこか遠い場所から爆発音が響いた。わずかな間を置いて連続している。航空機の爆音も聞こえる。上甲板へ通ずるハッチがあげはなたれているのだと菅沼は思った。でなければ、艦艇の内部に爆音など伝わらない。このほかにも通路を叩くような硬質の足音が無数に響いている。ともかく、かまびすしいことこのうえない。

空襲か、菅沼は思った。いやまて浦賀水道なんだぞと思ひなおす。じゃあなんだ、と通信参謀に視線を向けた。「右舷後部水線下に一発喰らった」通信参謀はいった。

「被雷か触雷かまだわからん」

「触雷でしょうね」菅沼は無感動な声でいった。艦の位置からいつてそう判断すべきだと思った。「機雷原から流出したやつでは」

「だといいがな」通信参謀はこたえた。いらぬ講釈をしやがるという表情で菅沼をみていた。かれは念をおすように訊ねた。「貴様、本当に大丈夫なんだな？」

菅沼は大きく息をすいこみ、全身に力をいれた。右肩がわずかに痛み、頬が熱をもっているのがわかった。口のなかにも不快な痛みがあった。舌をねじまげ、そこをなめる。顔をしかめた。口内に切り傷があるのだった。原因はわかりきっていた。すくなくとも、魚雷や機雷によつてではない。通信参謀を殴りたくなつてくる。

「大丈夫です」菅沼はうなずいた。頬が痛み、口が切れたほかは、いいかけてやめる。相手の顔つきはあまりにも真剣だった。菅沼がこのむ質の軽口は通じそうにない。

部署につきます、と菅沼はいった。

「いや」通信参謀は首を横にふつた。ハッチの向こう側にみえる通信指揮室を親指でしめす。「あつちは人手が足りてる。上甲板をひとまわりして周囲の状況を確認、報告しろ。司令官は羅針艦橋におられる」

「はい」菅沼は立ちあがった。いくらか心配そうな顔つきでかれをみていた通信参謀も、立ちあがったことを確認すると、急げよといって救命胴衣を手渡し、どこかへ

駆けていった。

菅沼は救命胴衣を着用した。苦笑が浮かぶ。救命胴衣の紐を身体のアチこちで締める度に、被虐趣味の女になつたような気分がするからだつた。

菅沼は傾斜した通路を進んだ。身体が慣れたためか、傾斜をあまり感じなくなった。反対舷、つまり左舷への応急注水が効果を發揮しているのかもしれない。もちろん、大穴が開いた右舷では応急対策が懸命におこなわれているはずだった。

セルター甲板は艦橋（上部構造物）の二階部分であつた。上甲板と同じ高さにある。菅沼が上甲板へでは、あけはなたれているハッチをくぐり抜けるだけでよかった。かれがでたのは左舷側上甲板だった。

海上は冬の陽光にてらしだされていた。蒼みの深い海面に波はない。遠くに深緑色の陸影がある。他のすべてを無視するならば、清々しいとさえ表現できる情景。そしてもちろん、菅沼が注視すべきは「他のすべて」のほうなのだった。

洋上は控えめにいつても大混乱だった。

何隻もの商船が見えた。速力を落としている。船首甲板を波にあらわれ、ほとんど停止している船もあった。

周囲を三隻の小さな海防艦がめぐり、海面にむけて俯角を一杯にかけた主砲や機関砲を放っていた。海防艦も速力を落としている。

触雷だ、菅沼は思った。固定用の鎖が切れて機雷原から流れだした機雷に艦が触れ、喫水線下に損害をうけたに違いない。でなければ、海面にむけて射撃をくわえない。射撃の理由は、もしほかの機雷があればその衝撃で爆発させてしまうため。間の抜けた情景ではあるが、意味がないわけではない。

菅沼は上空に視線を向けた。そこには三機の双発機が旋回していた。もちろん友軍機だ。《東海》^{とうかい}などと菅沼はあたりをつけた。五、六年前に開発された対潜哨戒機だが、すでに機体としては旧式化している。磁探——^M磁気探知装置^Aの性能がよいため現役に残っているが、その数はすでに一〇〇機を切っている。海上護衛総隊司令部で教えられたかぎり、ほとんど練習機のあつかいはずだった。

機雷か。それもおそらくは日本海軍みずから敷設^{ふせつ}した。菅沼は笑いだしたくなった。戦争というのはこれだ。はてしもなく莫迦^{ばか}なことばかりがおきる。おまけにこれが自分の体験するはじめての「実戦」だ。泣かせてくれ

るじゃないか。

かれは海面に視線をもどした。そこを注視する。背筋が凍った。機雷だとするならば、あの、海中を突進する青白い影はなんなのだ。

「左一〇度、雷跡らしきもの、目測いっせんごひゃあーく！」菅沼は叫んだ。上甲板で作業をしていた連中がどよめきをあげ、一斉にそちらを注視する。青白い影の進行方向には他の艦船との衝突を避けるために最微速——三ノット程度に速力をおとした商船がいた。

上甲板のあちこちで報告や号令の声が響いた。菅沼は上構内部へ駆けもどった。ラッタルをのぼり、途中ででくわした水兵をはねとばすようにしておしのけ、羅針艦橋へ飛びこむ。大声で報告する。

「左一〇度に雷跡！ 八時方向の商船に向かう！」返答はなかった。すでに報告があったのだろう。艦橋では号令が矢継ぎ早に発せられていた。

戦隊司令は艦橋の脇にはりだしたブルワークで双眼鏡をかまえていた。器内通話機^{テレストイク}のレシーバーをつけた伝令が水上見張員の報告を各部に伝達している。艦長の姿は見えない。羅針艦橋の上にある防空指揮所にいるのだろうと菅沼は思った。露天であるため、視界が良いからだ

った。これほど——主砲^エ用揚弾器^ベの使用が難しいと思われ、るほど——艦が傾斜した現状で、船体内部の戦闘指揮所にいるとは考えにくい。損傷で電路がやられていれば、戦闘指揮所を埋め尽くす最新装備の端末は何の役にも立たない。

海面に爆音^{ヒツキ}が轟いた。左舷側だった。菅沼は八時方向へ視線を向けた。さきほどの貨物船に水柱があがっていた。船尾には日章旗。

爆発物は搭載していない、菅沼は判断した。でなければ、命中と同時に水柱さえ吹き飛ばすような爆発が発生するはずだった。

うなり声やののしり声が満ちた艦橋で菅沼は言った。別命なくば上甲板の確認にもどります。ひきつった表情の通信参謀がふりかえり、わずかにうなずいてみせた。

菅沼中尉は上甲板へと駆けおりた。艦内には号令が響いている。戦闘爆雷戦。

左舷側上甲板へ出たとたん、海面で新たな爆発が発生した。艦の左正横^{せいおう}六埋^{かいり}ほどの位置にいた商船が船尾に被雷したのだった。一瞬おくれで閃光^{きく}が煌めく。轟音と空気の波がおしよせてきた。菅沼はあわてて甲板に身を伏せた。息がつまる。このあたり、前線にでたことがな

いかれの動作はどうにも遅れ気味になる。

貨物船は火山爆発のような爆煙を高くたちのぼらせていた。菅沼は呆然とした。船の上部構造物がのきなみなぎ倒されていたのだった。爆発物、おそらくは火薬を満載していたにちがいがなかった。黒焦げになった船体は急速に傾斜を増し、水中に没しようとしている。

射撃を中止した海防艦が右舷に回頭しはじめた。菅沼はそちらを見た。目標——敵潜水艦を探知したわけではないことはすぐにわかった。海防艦は二本の魚雷に狙われていた。

あの位置ならば回避できるかもしれない、菅沼は思った。すぐに自分があやまっていることに気づく。魚雷は、海防艦の動きにあわせて針路をかえていた。誘導魚雷なのだった。

可哀想に。菅沼は思った。旧式の甲型海防艦。基準排水量は一〇〇〇トンもない。魚雷一発でお陀^{だぶ}仏だ。

二本の魚雷、うち一本が海防艦への追尾をやめた。誘導装置が故障したらしい。しかしもう一本は急回頭を続ける艦を追いつづけた。

海防艦の右舷艦尾付近で両者の動線は交差した。菅沼はふたたび甲板に伏せた。今度は間の抜けた動作ではな

い。あれ、と思う。海防艦をみる。右舷に水柱はない。魚雷の調定深度が深すぎ、艦底をくぐりぬけて——かれがそこまで思ったところで、海防艦の左舷艦尾付近に大きな水柱が生じた。海防艦が大きく揺れる。機銃座や甲板から何人かが海上へ放り出されるのが見えた。

磁気信管だ、菅沼は思った。艦の磁気を探知して、魚雷の実用頭部に詰まった数百キロの炸薬を起爆させた。畜生。結局は同じか。強烈な水中衝撃波で舷側に破孔が生じている。あるいは艦底付近で起爆したのかも。

海防艦は大きく揺れながらも回頭を続けた。海上に、奇妙な悲鳴がちいさく響いた。海防艦の艦尾波がわずかに紅く染まった。海上に放りだされた乗員の一人が艦尾にひきよせられ、スクリューに切り刻まれたのだった。一名戦死確実。

戦争。菅沼はつぶやいた。そして立ちあがった。たしかにかれは戦争のただなかにいた。そして誰でも、自覚したくないことのひとつや二つは持っているものだった。かれが乗っている艦は軽巡洋艦（能代）。同型艦すべてが船団護衛部隊旗艦としての改装を受けた阿賀野級軽巡の二番艦だった。そして《能代》が浸水傾斜し、何隻もの艦船が被雷しているこの海は浦賀水道。東京湾の外湾

部であった。日本帝国とその海軍は、その表玄関でドイツ潜水艦に翻弄されていた。恐るべき灰色狼どもに、守るべき羊たちを食い荒らされているのだった。

2 灰色狼たちの王

一月二五日

午前八時三二分（ドイツ標準時）

午後四時三二分（日本標準時）

ドイツ海軍総司令部

グロス・ベルリン、大ドイツ

フロントにちいさな元帥旗をたてた黒塗りのメルセデスは冷気に満ちたザールラント通りを北西にむけて進んだ。ポツダムー広場駅を越したところで左に折れ、ポツダムー・シュトラッセにはいる。すでに出勤のラッシュは終わりがけているため、渋滞にまきこまれることはない。もし渋滞で邪魔された時は、メルセデスの前方と後方で護衛についているキューベルワーゲンにのった海軍憲兵たちの出番ということになる。

しかし後席に座っているメルセデスの主は、よほど急いでいる場合でもないかぎり、憲兵たちに仕事をさせようとはしなかった。渋滞を甘んじて受け入れた。なぜな

らば、われわれは渋滞を引き起こしている人々のために戦っているのだからね、ある時その理由を訊ねられた主はそうこたえた。その言葉に諧謔かいぎくはまったくふくまれていなかった。かれは本当にそう信じこんでいるのだった。

この日、主は車内で夜の間にとどけられた報告の要約に目を通していた。毎日の習慣だった。かれは時間を無駄にできなかった。その点、いまだまったく海軍士官らしい男だった。

メルセデスの主はいった。「全欧あわせて月産一五隻か！ ヴェルナー、もうすこしなんとかならんものかな」

「先月の潜水艦損失は九隻でした」隣に座っていたヘルベルト・ヴェルナー中佐はこたえた。欧州共通といつてよいデザインの新海軍士官制服がよくにあう男だった。父性的な顔立ちをもっている。

「六隻の増加」主はつぶやいた。そしてちいさくつけくわえた。「五〇〇名もの戦死者。あわれなおさな子たち」「正確には四六七名です」ヴェルナーはチュートンの訂正を口にした。「ソコトラを失った影響です。ゴアに残っていた（モンスーン）戦隊の一部が侵攻船団の迎撃に

投入されましたから。その分をのぞけば、敵艦船と我が潜水艦の交換比は七・四対一です。ボート一隻をうしなうたびに七隻以上を沈めています。まあ、その大半は合衆国相手に稼いだものですが。日英枢軸に限った場合、われわれのボートと敵艦船との交換比は五・九対一になります」

「なんとかして一〇対一にもつてゆきたいものだ」主はいった。「日英同盟相手に」

「そのためには」ヴェルナーは醒めた声でこたえた。「最新鋭の長距離型ボート一〇〇隻以上を洋上に展開しつづけねばなりません。つまり五〇〇隻ほどのボートを保有し続ける必要があります。欲をいえば六〇〇隻以上」

「夢物語にきこえるな」主は言った。ドイツ潜水艦隊が保有する航洋型潜水艦は三〇〇隻以下にすぎなかった。日英枢軸の対潜艦艇とわたりあえる性能をもった艦はその半数程度でしかない。つまり、大ドイツ帝国海軍が七つの大洋に展開しつづけられる潜水艦は、せいぜいのところ三〇隻だった。

「前の戦争とはずいぶん違いますからね」ヴェルナーは言った。「あの頃は、ちいさな水上艦隊をのぞけばボートだけで戦争ができました。大西洋を越える補給路を維

持する必要ありませんでした。欧州の全造船力を投入しても、必要数を満たすのは至難です。その大半を輸送船、タンカー、護衛艦艇の増勢にふりむけねばなりません」

主が訊ねた。「艦長に復帰したいのか、ヴェルナー？ ふたたび、灰色狼たちの群にもどりたいか？ あたらしいボートと共に」

「正直なところ、よくわかりません」ヴェルナーはこたえた。「デーゼルの臭気。腐りかけた食料やトイレからただよう悪臭。二ヶ月も風呂にはいれない男たちの臭い。歯磨きがわりのガム。爆雷攻撃の恐怖。探信儀の放つあの耳ざわりな音。頭上をとおるすぎるスクリューの低い響き！ もういちどあれに耐えられるのか、どうか精神をやられてしまうかも」

「気持ちにはわかる」主はこたえた。「わたしが経験した戦争は君のそれとはすこし違うがな」

ヴェルナーは微笑した。「恐怖と緊張にちがいはないでしょう、たとえ最初の世界大戦であっても。ああ、ところで、本日の予定ですが、やはり、リンツへ？」

「総統大本营には予定どおりに出発する」主はこたえた。

「はい」ヴェルナーはうなずいた。「明日、帰国したボ

ートの艦長たちに総統みずから騎士十字章を授与される予定になっております。そのうち二人はまだ二四歳です。英雄となるには若すぎる気がしますな」

「本来ならば、わたし自身が、かれらの帰港を出迎えてやりたいのだが」主はためいきをついた。「戦場が全世界では、いかんともしがたい。総統はわたしが現場にでることをお許しにならない」

「すべてのボート乗りも同意見でしょう」ヴェルナーは素直にこたえた。次席副官の言葉を耳にしたドイツ海軍総司令官、カール・デーニッツ元帥は複雑な微笑をうかべた。照れているのだった。第二次世界大戦を潜水艦隊司令長官として戦ったかれは、灰色狼たち——潜水艦乗員から絶大な信頼と敬意をよせられている（灰色狼という形容は潜水艦そのものをあらわす場合もある）。

車載電話のベルが鳴った。ヴェルナーは野戦通信機よりもひとまわり大きいその受話器をとった。応対するふたこと、みことかわしたあと上官に報告した。

「閣下、あなたの息子たちの一人がなかなかの戦果をあげたようです」

元帥専用車は右に折れ、陸軍運河ぞいにティルピッツウーファーを走りだした。陸軍総司令部の真向かいにあ

るドイツ海軍総司令官部まで、もう数分の距離だった。

日本帝国の心臓部でドイツ潜水艦のあげた大戦果は、幾つかの通信所を経由してベルリンに到着した。

といつても、東京湾付近に展開している四隻の潜水艦が直接報告してきたわけではない。そのはるか後方、中部太平洋で待機を続けていた補給用潜水艦が日本軍の混乱した平文の発信を傍受し、定時発信の際にごく短い報告をおくってきたのだった。解読された傍受報告の内容は電話で関係者に伝えられた。大半の高級参謀はすでにOKMでその日の業務へとりかかっていた。登庁したばかりのデーニッツもその例外ではなかった。報告をうけた彼らは地下の総司令官指揮所に集合した。テニスコートほどの広さがある薄暗い地下室には、地球上で活動するすべてのドイツ——欧州連合艦船の作戦行動を管制するだけの設備がそなえられている。

「おそらく商船二隻は確実でしょう」情報参謀のヘルベルト・グッゲンベルガー大佐が言った。「重巡一隻、駆逐艦一隻の方は、そうであれば良いが、というところですよ」

グッゲンベルガーは皇帝の寝台ほどの大きさがある地

図台に視線を据えた。地図台には世界地図が広げられていた。海上のあちこちに、青色の駒が置かれている。その駒はそれぞれ一個戦隊をあらわしているのだった。日本本土、東京湾の脇におかれている駒は一個。潜水艦をかつどつてゐる。

「誰の艦だ？」背筋をのばしたまま地図を眺めていたデーニッツは訊ねた。

「おそらく、シュレーデルのU3728でしょう」作戦参謀のヘルトリンク大佐が言った。「他の艦はミルヒク——との会合点に向かっているはずですよ」

「シュレーデル？」デーニッツは訊ねた。口元に微笑が浮かぶ。「あの『サムライ』パウルのパートか？」

「はい、閣下」ヘルトリンクはこたえた。かれも微笑している。パウル・シュレーデル中佐はドイツ海軍きつての日本趣味で知られた男で、乗艦に日本刀を持ちこんでいるという噂があった。第二次世界大戦前には大使館付海軍武官補として東京に駐在したこともある。その大戦では合計一〇万トンの艦船を撃沈していた。

ヘルトリンクは言った。「やつこさん、どうやら一五万トンの大台にのつたようですね。よほどトウキョウが懐かしいとみえます」

「パウルのボートは？」厳しい表情にもどつてデーニッツは言った。シュレーデル中佐のあやつる潜水艦のクラスをきいている。

「X₂X₇V₇F型です」ヘルトリンクはこたえた。「航続距離をのばした水中高速型。ヴァルター推進艦ではありません」

ブルーノ・ヴァルター氏の手になる無酸素機関は、潜水艦に水中高速発揮能力を与えたが、航続距離を大幅に減少させもした。高濃度過酸化水素水——アウロル燃料の一部というかたちで酸素まで持ち歩いているからだつた。

このため、ドイツ海軍が保有している新型長距離潜水艦は、ヴァルター推進を搭載していない。電池やモーターの効率を改善することにより、水中高速能力を得ている。もつとも、いまだ最大速力はヴァルター推進艦に及ばない。ヴァルター推進に勝る水中高速性能を達成するには、電池・モーターにくわえて、船体のデザインをまったく新しいものにする必要があると考えられている。「うまく逃げてくれればよいが」デーニッツは心配そうにつぶやいた。

大ドイツ帝国、ひいては欧州連合の全海軍力を統率す

るカール・デーニッツ元帥は五〇代後半にふみこんだ瘦身の男だつた。しかし、秀でた額と鷲鼻、そして知的な瞳が配された顔面に老いを感じさせるものはまったくなかった。その体型も、UC 25、UB 68と名付けられた潜水艦の艦長として抜群の武功を示した第一次世界大戦当時とまったく変化がない。活力にいたつては年毎に増しているようにすら思われた。すくなくとも、かれの幕僚として勤務する人々はひとしくそれを認めている。

事実、デーニッツは大西洋と太平洋で行動するすべての艦艇について常に必要十分な事柄を把握していた。全世界で作戦する部下たちが援助を求める時、その所在地にちなんてティルピッツウーファーと通称されるベルリンの海軍総司令部からそれなりの返答が寄せられるのだつた。

と言つても、前線で戦う男たちがつねにその返答に満足をおぼえるわけではない。罵倒のほうがまだましと思われるような反応がしめされることもあった。デーニッツがすべての艦艇に対して求める定時報告にいたつては呪いの対象にすらなつていた。それによって敵に位置を特定される危険が大きいからだつた。

一方のデーニッツにしても、自身がおかれた現在の境

遇を心から楽しんでいたわけではなかった。

ドイツ海軍軍人としての義務と名誉についてはまったく迷いをもっていなかったが、ベルリンは戦争よりも政治に近すぎる場所だとは思っていた。総統みずからが采配をふるっているベルリン改造計画によって莊重さ（そうちよう）と機能性を増したOKMはどうにも好きになれなかった。

あの奇怪な地下施設、リンツの総統大本営にいたつては言うまでもない。第二次世界大戦の開幕を潜水艦部隊指揮官としてむかえたヴィルヘルムスハーフェンのC＝O＝18号兵舎、牧草と畜牛に包囲されたトーテ・ヴェークが懐かしかった。かれはそこで生涯二度目の世界大戦、そのはじまりを罵ったのだった。

デーニッツは訊ねた。「日本人はどんな防衛体制をとっている？」

「連中は新鋭対潜艦艇のほとんどすべてを船団護衛に投入しています。といっても一五〇隻前後ですが。本土付近で実働可能なのは旧式駆逐艦と対潜用のコルヴェット——連中の言葉で言う「カイボウカン」が五〇隻以下、でしょう。トウキョウ付近に配備されている数はおそらく二〇隻程度と思われます。常識的にみて、出撃可能な

隻数はその半分、一〇隻前後ですな」グッゲンベルガーが言った。「囲まれさえしなければ、撤退は可能です。問題はむしろ航空機かもしれません。カントウには海軍航空基地が多いですから。アツギやタテヤマでは対潜機の実戦部隊が完熟訓練をおこなっているはずです。シュレーデルをいい練習相手と考えるかもしれません。あるいは対潜用新兵器の実戦試験の標的にも」

デーニッツは脇で控えていたヴェルナーに視線を向けた。

「サムライ、パウルがどれほど電池を残しているか、それ次第ですね」ヴェルナーは言った。ベルリンで心配してもどうにもならないという意味だった。

デーニッツは眉毛をわずかにあげ、返答にかえた。かれの注意はすでに他へ、より大きな問題へうつっていた。インド洋を含む太平洋全域についてだった。

ソコトラ島の失陥により、太平洋方面でのドイツ海軍戦略は全面的な見直しを迫られていた。ティーゲルシャントエではパナマ運河を策源地とした大規模水上艦作戦（現在の潜水艦作戦ではなく）をはじめめるべきだという意見が強まっている。

「夕方には総統閣下に御報告せねばならん」デーニツ

ツは言った。「資料はあとで読む。まずは諸君の認識を再確認しておきたい。エーベルハルト?」

「インド洋經由の太平洋方面作戦は縮小すべきではない。エーベルハルト・ゴート中将がこたえた。かれはデーニッツとつきあいの長い男で、現在は参謀長をつとめている。『ある程度の兵力を拘置し続けるためだけに、アデン・ゴア間の補給線を積極的に維持する必要があるありません。アデンで寝ている東方艦隊の残存水上艦はひきあげ、かわりに潜水艦を増やすべきかも。その方が、敵にとつては面倒なはずです。連中、船団護衛戦力に關しておおいに不足を感じておりますからな。こちらの輸送船と護衛艦艇の手配も楽になります』」

「主力は?」デーニッツは訊ねた。

「水上戦力は北米艦隊に集中すべきです。ノーフォークを拠点にカリブ海・メキシコ湾方面で活発な作戦をおこない、合衆国大西洋艦隊の残存兵力を殲滅するのです。もちろん、北米総軍の作戦に呼応して行動させます」

ゴートはよどみなくこたえた。「欧州・北米間の海上交通路は、^{ホフホゼアフロツテ}高海艦隊に護衛艦艇をあつめ、護衛作戦を遂行させる、そんなところでしょうか。もつとも、後者についてはそれほど困難はありません。少なくとも現状

では。こちらの船団を狙う潜水艦は、合衆国のわずかな生き残り、と、アフリカ南部と南米から出撃する日英枢軸の潜水艦だけです。一船団あたりの平均最大敵数は、いまのところ一隻に達しません。大雑把にもしあげれば、三個船団に一隻です。北米総軍の快調な進撃はこの現実を支えられております。もつとも、これはわが方が太平洋で展開している通商破壊戦も同様ですが」

「ボートはどうする?」デーニッツは言った。「ゴアからすべてを作戦させるわけにはいかんぞ」

「パナマから作戦させるほか、ありますまい」ゴートは言った。「わが航洋型潜水艦の航続距離は、²₁XXI型以後、一〇ノットで一四〇〇〇哩を基準としております。新型艦の場合は一六〇〇〇哩です。ミルヒクーを増強しさえすれば、西太平洋での作戦に問題はなりません。現状でのミルヒクー保有数は六〇隻程度ですから、通常の作戦行動には充分に対応できます」

「北太平洋ではどうだ?」デーニッツはたずねた。

「²₇XXVII型以降の艦であれば二度の洋上補給で作戦できますが」ゴートは言った。「そちらはむしろ、日英同盟の領分です。もちろん、先ごろ編成されたわが太平洋艦隊がボートを送りこんでいます」

「一般的な目標の順位は？」デーニッツは西太平洋におかれた駒をながめながら言った。

「現状と同様に」ゴートはこたえた。「第一は合衆国の商船。第二は日英枢軸の船団、ですな。三番目はサンディエゴとハワイの真珠湾に退避した合衆国太平洋艦隊」

「ヘルトリンク？ 君の意見はどうだ」

「理想論から申せば、日英枢軸の船団です」ヘルトリンクが言った。

「航続距離が問題だ。ミルヒクーを用いてさえ」ゴートが反論した。「日英枢軸の船団を狙う場合、戦場は北太平洋になる。合衆国、カナダ太平洋岸の対潜哨戒網を迂回してそこまでゆくには——」

「たしかに」ヘルトリンクはうなずいた。

北太平洋における船団襲撃については、開戦前に研究がおこなわれたことがあった。その結果はとんでもないものだった。航続距離、居住性を改善した水中高速潜が二〇〇隻、補給用潜水艦が五〇隻、パナマにおかれる根拠地に弾薬・燃料等を輸送するため、一ヶ月にいちど中規模の船団を組む必要があった。ルイジアナ、テキサスといった地域をおさえ、油田と後方根拠地を確保したあとでなければとても実現できない。

「しかし、現状の、たとえば日本本土近海での嫌がらせじみた襲撃よりはよほど実効的です」ヘルトリンクは言った。「それに、北太平洋でいまおこなわれている散発的な襲撃ですら、それなりの効果をあげているではありませんか」

「相手が本気になつていないだけだ」ゴートが言った。

「潜水艦狩りに長けた英国人と、この前の戦争でそれを学んだ日本人が相手だぞ。覚えているだろう、前の戦争でペルシャ湾に派遣したボートの喪失率を」

「約四〇パーセント。最悪でした」ヘルトリンクはあつさりと同じした。しかし、意見を変えようとはしなかった。「しかし、効果はあがります。それに、合衆国商船隊の急速にすぎる崩壊は、よい結果だけをもたらすとは限りません」

「ああ、あれか。不思議な議論だが、妙に説得力はある」ゴートが同意した。

作戦的見地からすれば、合衆国商船隊の崩壊はまったく望ましい。その点に疑いはない。しかし、商船隊のあまりにも早い崩壊は、合衆国を日英枢軸との連合に追いやることにもつながる。なぜならば、あの合衆国ですら、戦略物資のすべてを国内でまかなうことはできないから。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。